ぜんこうじみち 安原

安原のいま	総人口 4,620人（前年比－43人）【男 2,228人　女2,392人】 安原地区公民館 〒390-0802 松本市旭2-11-13 TEL 0263-39-0701

学びの成果を街づくりに 安原地区歴史研究会

安原町の北側に位置する十王堂跡

安原地区公民館で活動するグループの一つに、安原地区歴史研究会（矢野喜世登会長）があります。地域の歴史や文化を掘り起こし、学びの成果を街づくりに還元しようと取り組んでいます。

平成18年に発足し、現在18人が月例会のほか年1回のバス研修などで学習を深めています。県宝の橋倉家住宅と、松本城郭の北の守りとしてあった十王堂の清掃も大切な事業です。

学習の成果は冊子『安原地区の歴史探訪』にまとめられています。「みんなで研究、みんなで書く」と呼応して、町の成り立ちや史跡、人物、自然災害などを分かりやすく取り上げました。歴史マップの作製や文化財の説明板も、会員たち「ワン・チーム」の成果といえます。

人物の項では、女子教育の先駆けとなった鳩山春子や、野口英世のやけどを手術した近藤次繁などゆかりの先人にあらためて光を当てました。

新型肺炎の拡大防止で中止となった善光寺街道の探訪企画は、6月29日に延期しました。今後、数回に分けて麻績宿や稲荷山宿などを歩きます。

矢野さんは「歴史を引き継ぐのは地域の人しかいない。多くの住民に参加してもらい一緒に取り組んでいきたい」と話しています。

酸味と苦み 男のコーヒー講座

真剣な表情でコーヒーを淹れる男性参加者

安原地区福祉ひろばで1月19日、昨年に続いて2回目のコーヒー講座を開催しました。

男性限定の今回は、18人が参加しました。30年程前からコーヒーの味にこだわり、腕を磨いてきた地元の澤柳清一さんと勝野英一さんが講師となり、一人一人が120グラムの生豆から焙煎、ミル、ドリップに挑戦しました。

浅く炒ったものほど酸味が強く、深く炒るほど苦味が増すとのことで、参加者は生豆を炒る時間や火加減を調節していました。「酸味の強いコーヒーを淹れたいな」と好みに応じて仕上げていました。

ドリップが始まると部屋中にコーヒーの香りが漂ってきました。初めて焙煎した男性は「酸味と苦みが絶妙なバランスでいいね」と言いながらゆっくりと味わっていました。

栄養価の高い 玉ねぎ糀作り

松田さんの指導で
玉ねぎ糀を作る受講者たち

食育講座「糀（こうじ）を使いこなそう」が1月15日に安原地区公民館で行われました。昨年2回にわたって実施され、好評を博した講座のアンコールとして「玉ねぎ糀」を作り、12人が参加しました。

講師の松田尚美さんは「糀に多く含まれる酵素は消化など体の中の物質の変化を助けるたんぱく質ですが、加齢と共に体内で作る力が衰えます。積極的に発酵食品を取りましょう」と解説。とりわけ栄養価の高い玄米糀と、すりおろした玉ねぎと塩を使って玉ねぎ糀を作りました。消毒した容器内で混ぜられた材料は、1日1回かき混ぜると1週間ほどで完成します。

塩糀を作った前回に続いて参加した女性は「糀を活用する講座はあまりないのでよい機会になりました。糀の使い方にはいろいろなバリエーションがあり家でも少しずつ試していますが、もっと知りたいのでぜひまた開いてほしい」と笑顔で話していました。

出来上がりが楽しみ
プロが指導　味噌づくり講座

味噌の仕込み時期に合わせて安原地区公民館は1月16日、今年度で3回目の講座を開催しました。16人が参加し4グループを作り、プロの味に負けないように仕込み作業をしました。

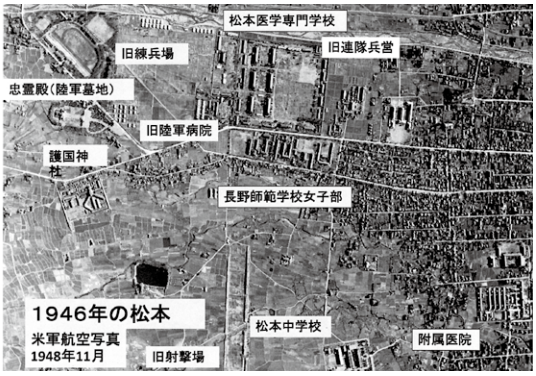
市内出川町7丁目にある丸正醸造社員の柏原広さん、今井啓介さんが講師を務め、材料の煮大豆と米麹、塩を用意してくれました。材料をそれぞれ計り取り専用のビニール袋に入れ、種水を調整して耳たぶの硬さになるようにします。

仕込みについて語る柏原さん（右）

今回で2回目の女性は「もっと力を入れて押すんだよ。豆の形が見えなくなるまでぎゅうぎゅうと体重を乗せて押すといいよ」と初めての参加者に教えていました。「前回は、出来上がりまで10カ月と言われて待ちきれなくて9月頃に食べたけどおいしかったよ。待ってられないよね。おいしいんだから」と会話を弾ませながら作業していました。

大きな樽を持参してできあがった味噌6キロを詰めていた初めての参加者は「材料をビニール袋に入れて混ぜ合わせると雑菌が入らずに手も汚れない、いいアイデアだ。どんなふうに出来上がるのか楽しみです。夏頃に味見してみたいな」と笑顔いっぱいに話していました。

味噌づくりに取り組む参加者たち



写真の左が北

安原地区公民館
信大キャンパス探検隊⑮
松本旭キャンパスのルーツを探る

松本旭キャンパスの広大な敷地のルーツについて、大学史資料センター教授の福島正樹先生に伺いました。

明治8年、陸軍省が筑摩県桐村に兵営予定地として確保した6万坪がそもそもです。美しい見事な長方形の所轄地でした。当初、構想にあった旧松本城郭地では狭い、との判断による代替地でした。

松本町からの寄付もありました。松本女子師範学校の敷地に使われた時代を経て、松本五十連隊の設置時には約10万坪になりました。この間松本と上田を結ぶ第二道路（現・国道143号）が敷かれます。

県内の高等教育機関7校を母体にして信大が設立されたのは、戦後の昭和24年。往時の糧秣庫は「赤レンガ倉庫」として歴史を宿しています。

福島先生は「信大は軍都と学都の歴史を体現してきました。連隊とともにあった地域の生業がどうであったか、研究を深めたい」と語り、資料の提供や発掘の協力を呼びかけています。

いちょう並木
春先に咲くミツマタ
名前の由来

ミツマタはジンチョウゲ科ミツマタ属の落葉低木です。原産地は中国やヒマラヤ。名前は枝が3つに分枝する性質が由来です。

昔から高級紙の原料として栽培され、紙としては、紙幣や証書などに使われます。

ジンチョウゲ科の仲間特有の芳香があります。

枝々の先に蜂の巣のように集まった苞に包まれた蕾は冬の風物詩。

花は黄色で球形の頭状花、白い毛が密生した蕾の状態で春を待ちます。日向でも半日陰でも育ちますが、幼木時は直射日光を嫌います。

萌芽力は強く、込み合った枝を間引きをします。剪定した枝を使い挿し木で増やします。

蜂の巣のようなミツマタの花